武蔵野日曜聖書講筵

葡萄の樹に葡萄なし
――エレミヤ記第８章――

１９７４年5月26日
小池辰雄

開会の祈り　また向きを変える　向神の霊止　倒れるのは起き上がらんため　本然の霊を受けよ　愛は一切に勝つ　法に乗っかることが本当の自由　平和の奥には平安がある　我は葡萄の樹、汝らは枝　頼山陽の方向転換

【エレミヤ8】

1 エホバいいたもう その時 人 ユダの王等の骨とその牧伯等の骨と祭司の骨
と預言者の骨とエルサレムの民の骨をその墓よりほりいだし 2 彼等の愛し奉
え従い求め且祭れるところの日と月と天の衆群の前にこれを曝すべし 其骨は
あつむる者なく葬る者なくして 糞土のごとくに地の面にあらん 3 この悪き民
の中ののこれる余遺の者すべて わが逐いやりしところに余れる者 皆生くるよ
りも死ぬることを願わんと 万軍のエホバ云いたもう
4 汝また彼らにエホバかくいうと語るべし 人もし仆るれば起きかえるにあ
らずや もし離るれば帰り来るにあらずや 5 何故にエルサレムにおる此民は恒
にわれを離れて帰らざるや 彼らは詐偽をかたく執りて帰ることを否めり 6 わ
れ耳を側てて聴くに 彼らは善きことを云わず 一人もその悪を悔いてわがな
せし事は何ぞやという者なし 彼らはみな戦場に馳入る馬のごとくにその途に
帰るなり 7 天空の鶴はその定期を知り 斑鳩と燕と鴈はそのきたる時を守る
されど我民はエホバの律法をしらざるなり
8 汝いかで我ら智慧あり われらにはエホバの律法あり ということをえんや
視よまことに書記の偽りの筆 之を偽りとせり 9 智慧ある者は辱しめられ ま
たあわてて執えらる 視よ彼等エホバの言を棄てたり 彼ら何の智慧あらんや
10 故にわれその妻を他人にあたえ 其田圃を他人に嗣しめん 彼らは小さき者よ
り大なる者にいたるまで皆貪婪者 また預言者より祭司にいたるまで皆詭詐
をなす者なればなり 11 彼ら我民の女の傷を浅く医し 平康からざる時に平康平
康といえり 12 彼ら憎むべき事をなして恥辱らる 然れど毫も恥じず また恥を
知らず この故に彼らは仆るる者と偕に仆れん わが彼らを罰するときかれら
躓くべしと エホバいいたもう 13 エホバいいたもう 我彼らをことごとく滅ぼ

さん 葡萄の樹に葡萄なく 無花果の樹に無花果なし その葉も槁れたり 故にわれ殲滅者を彼らにつかわす
14我ら何ぞ此にとどまるや あつまれよ 我ら堅き城邑にゆきて其処に滅びん
我儕エホバに罪を犯せしによりて 我らの神エホバ我らを滅ぼし 毒なる水を飲ませたまえばなり 15われら平康を望めども善きこと来らず 慰めらるる時を望むに かえって恐懼きたる 16その馬の嘶はダンよりきこえ この地みなその強き馬の声によりて震う 彼らきたりて此地とその上にある者および邑とその中に住める者を食う 17視よわれ呪詛のきかざる蛇蝮を汝らのうちに遣わさん 是汝らを噛むべしと エホバいいたもう
18嗚呼われ憂う いかにして慰藉をえんや 我衷の心悩む 19みよ遠き国より我民の女の声ありていう エホバはシオンに在さざるか 其王はその中に在らざるかと（エホバいいたもう）彼らは何故にその偶像と異邦の虚しき物をもて我を怒らせしやと 20収穫の時は過ぎ 夏もはや畢りぬ されど我らはいまだ救われず 21我民の女の傷によりて我も傷み且悲しむ 恐懼我に迫れり 22ギレアデに乳香あるにあらずや 彼処に医者あるにあらずや いかにして我民の女はいやされざるや

●開会の祈り

詩篇第101篇を読みます。

ダビデのうた

「1われ憐憫と審判とをうたわん エホバよ我なんじを讃めうたわん 2われ心をさとくして全き道をまもらん なんじいずれの時われにきたりたもうや 我なおき心をもてわが家のうちをありかん 3われわが眼前にいやしき事をおかずわれ叛くものの業をにくむ そのわざは我につかじ 4僻めるこころは我よりはなれん 悪きものを知ることをこのまず 5隠にその友をそしるものは我これをほろぼさん 高ぶる眼また驕れる心のものは我これをしのばじ 6わが眼は国のうちの忠なる者をみて 之をわれとともに住まわせん 全き道をあゆむ人はわれに事えん 7欺くことをなす者はわが家のうちに住むことをえず 虚偽をいうものはわが目前にたつことを得じ 8われ朝な朝なこの国のあしき者をことごとく滅ぼし エホバの邑より不義をおこなう者をことごとく絶除かん」（詩篇101・1～8）

お祈りいたします。主さま、5月らしい朝をお与えくださり感謝いたします。この26日、いろいろな事情があって兄弟姉妹たちが来れないでおるようでございますが、どうぞそれぞれの所において一人びとりに適うように、主さま、御顧みくださることを願い奉ります。

エレミヤの預言を通し、また本日のあなたの真理を学びたく存じております。預言者たちはみな実存そのものをもってあなたの御言を承り、あなたの御声に従い、その生涯を捨て石として突っ走ったひとたちでありました。どうぞ、私たちもこの預言者たち、使徒たちのあとをついで、小さき器ながら、聖国の捨て石となることが出来ますように、いよいよお鍛えくださらんことを、御顧みくださらんことを願い奉ります。今、この会を始めるにあたり、聖名により捧げ奉る。アーメン。

讃美歌271番「いさおなきわれを」を歌います。

●また向きを変える

エレミヤの続きをいたします。今日は第8章です。

1 エホバいいたもう その時 人 ユダの王等の骨とその牧伯等の骨と祭司の骨
と預言者の骨とエルサレムの民の骨をその墓よりほりいだし
エライことですね。「その時」というのは、敵が侵入してきてエルサレムを殲滅する時。
2 彼等の愛し奉え従い求め且祭れるところの日と月と天の衆群
星々を拝む、アッシリヤやバビロニヤの愚像崇拝であります。それは大いにこのユダヤの方にも取り入れられて、信仰が乱れていたわけですから。
の前にこれを曝すべし 其骨はあつむる者なく葬る者なくして 糞土のごとくに
地の面にあらん 3 この悪き民の中ののこれる余遺の者
「シェーリート」といいますが、いわゆる「遺れる者」、イザヤ書に出てくる。
すべて わが逐いやりしところに余れる者 皆生くるよりも死ぬることを願わん
と 万軍のエホバ云いたもう
そういう恐ろしいことになると。とにかく、エレミヤの預言のあとで正直――あるいは預言と共にといってもいいくらい――南の国ユダはアッシリヤに滅ぼされたわけですから。
4 汝また彼らにエホバかくいうと語るべし 人もし仆るれば起きかえるにあ
らずや もし離るれば帰り来るにあらずや 5 何故にエルサレムにおる此民は恒
にわれを離れて帰らざるや 彼らは詐偽をかたく執りて帰ることを否めり
預言者の預言がいつも空しいというわけです。
6 われ耳を側てて聴くに 彼らは善きことを云わず 一人もその悪を悔いてわが
なせし事は何ぞやという者なし
「われ」というのは神さまです。神さまのわざをちっとも注目しないというわけです。
彼らはみな戦場に馳入る馬のごとくにその途に帰るなり 7 天空の鶴はその
定期を知り 斑鳩と燕と鴈はそのきたる時を守る されど我民はエホバの律法
をしらざるなり
4節の、

「**人もし仆(たお)るれば起きかえるにあらずや**」

「たおれる」「ナーファル」というのは本当に躓き倒れるような字です。そうすれば、起きかえる。「起きかえる」という字は、キリストが少女に

「**少女よ、起きよ**」「**タリタ、クミ**」

と言った、あの「クーム」という字です。起き上がる。その次の言葉が面白い。

「**離るれば帰り来(きた)るにあらずや**」

と日本語ではなっている。それでよくわかるんですが、英訳では、「turn away」〔そっぽを向く〕と「return」〔帰る〕という言葉になっている。ところが、ヘブライ語は全然同じ字が使ってある。

「**イム ヤーシューブ ウェ ロー ヤーシューブ**」

という。「ヤーシューブ」というのは、「シューブ」というのは

「向きを変える」

ことなんです。「もしも向きを変えれば」というのは、本来いい方へ向いていたのが、

「向きを変えれば、また向きを変えるのではないか」

ということは、今度は「もとの所へ向きを変える」という意味です。同じ字を使って、なかなか面白い言い方をする。ルッターは、「irre gehen」〔間違って行く〕と「recht kommen」〔正しく来る〕という言葉を使っています。

●向神の霊止

「向く」という。向日性という。向日葵(ひまわり)は日に向かって自分の頭をめぐらす。日に向かう。要するに、人生は向き一つですよ。自分をしょっちゅう見ている。自分の方に、向我なんて――そんな言葉はないですよ――それから、人ばっかり見ている、向人。その他いろんな物質の方を向いてみたり、要するに向き方ひとつなんです。ところが、二次元的な世界で自分を向こうが、横を向こうが、これは結局よさそうだが、どこを向いても、とどのつまりは八方塞がりだ。八方を向いたってダメなんだ、八方向きなんて。八方美人なんてのもあるけれども。どこを向いてもぶつかる、自分でも。

ところが、一つ、向きでぶつからないのは、上を向く。正に

「向天」

なんだ。天に向く。向天に転向しなかったらいかん。向きを転ずる。向き方を転ずる。天界は開いている。霊界はいつも開いている。ギリシア語の「アントローポス」「人間」という字は、

「上を向く者」

という字。ギリシア語では、人間は本来、上を向く者です。

日本語では「ひと」というのは、申し上げている通り、霊が止どまる

「霊止（ひと）」

本当に向日、向天、向神、神に向かって向神の霊止（ひと）。向神のひとになるためには、実は霊止（ひと）でならなければいかん、霊が止どまっていなくては。神霊がここに〔中に〕止どまる。神霊が内住しない限り、この向天、天極に向かって向くということは可能でない。……

自分の中に、

「主さま！」

と叫ぶものがある。これが即ち御霊の世界です。御霊の聖霊のバプテスマを受けたひとは必ずこの最後の一点、最後の立場を持っている、立場ならざる立場を。それが

「主よ！」

と叫ばせる。

「南無妙法蓮華経！」

「南無阿弥陀仏！」

と言わせる。言わせるんです、自分が言っているのではない。言わされている、何か知らんけれども。信仰はその事態にこないと、本ものではない。自分でもって力んで、

「しょうがない、まぁ分からないけれども、信じておこう」

なんてね（笑）。そういうかぎりは、どこかでぶっ倒れてしまうし、行き詰まるし、下手すると、それこさどこかへ向いてしまう。再び帰らざる向き方をする。そうすると、暗礁に乗り上げてしまう。そういう「向く」ということ。これは向かせられる。実は引っ張られる。太陽は地球を引っ張り回している。地球は太陽の方に、回りをめぐらざるを得ない。どこか他へ行くわけにいかない。磁石は北極を指さざるを得ない。磁性を帯びているから。磁性を帯びていない鉄は北極を指さない。磁性を帯びているから、いくら揺れても必ず北を指す。我々はこの磁性を、霊性を帯びる。

だから、霊性無き人がたくさんいるわけだ。本来は人間は霊的な存在であるのに、神霊が止どまっていない。

今日のエレミヤは、この4節と13節が相呼応している。聖書はどこを読んでも、そこに何か真理がこぼれている。それを中心にしていく。もうそれで他はいいんです、どうでも。他はあまり研究したら、無駄だよ時間が。他はサッと読んでおけばいい。とにかく、聖書を根掘り葉掘り研究するのは悪くはないけれどもさ、人生は限りがあるからね、大事なところをしっかりつかむことです。……

●倒れるのは起き上がらんため

そういうのが、この「向く」というわけです。ここのところは、

「帰りきたるにあらずや、そうではないか。別な方に向いたら、必ずまた元に向き変えるのが本当ではないか」

と、エレミヤが切々と言っている。

「イム　ヤーシューブ　ウェ　ロー　ヤーシューブ」

という。

「イム」というのは「もしも」、

「ヤーシューブ」「別な方に向いたならば」、

「ウェ　ロー　ヤーシューブ」「また向き変えるのでないか」

と。「ロー」というのは反語的な言い方だ、「にあらずや」という。

「人もし倒るれば起きかえるにあらずや」

と。倒れて、まぁそこらにいる子供は泣いてしまうけれども、泣いても起きかえらなければダメだよな、「お母さん、起こしてください」では。

その言葉ですぐ思い出すのはブラウニング〔R. Browning 1812～1889〕の有名な句ですね。ブラウニングの「Epilogue to Asolando」（「アソランド」跋詩）という詩です。

One who never turned his back but marched breast forward,
Never doubted clouds would break,
Never dreamed, though right were worsted, wrong would triumph,
Held we fall to rise, are baffled to fight better,
Sleep to wake.
No, at noonday in the bustle of man's work-time
Greet the unseen with a cheer!
Bid him forward, breast and back as either should be,
"Strive and thrive!" cry "Speed,—fight on, fare ever
There as here!"

断じて背を向けしことなく、
　真向ひに突き進み、
むら雲の霽れゆくをつゆ疑はず、
正義の不況にも邪悪の勝利を
　夢みしこと嘗てなく、
倒るるは起たんがため、
　挫折るるは更に善く戦はんため、
眠るは醒めんがためと硬く信ぜし者ぞ。
然り、真昼時、活動繁きただ中に、
去り逝く者を歓呼して送れよ！
向背は問うにや及ぶ、ただ命ぜよ前進を。
「敢闘！　栄光！」と呼べ。また叫びてよ

「勇躍、邁進（まいしん）、絶えず前進、
彼岸なほ　此岸の如く！」と。〔著作集 第8巻『詩歌集』／五、玉髄集（訳詩集）小池訳〕

非常に力強い言葉ですね。「その人」というのは自分のことですよ。その人は自分の背中を決して向けたことがない。即ち、敵に背を向けたことがない。胸を張って突進して行った者で自分はあると。だから、

「もし自分がこの世から去ったら、みな歓呼の声をあげて、私を「万歳！」と言って送ってくれ」

というわけです。

雲が破れることを疑ったことがない。いくら雲に被われても必ず雲が破れることを疑ったことがない。正しい者がやっつけられようとも、間違ったことが勝利を占めるとは決して夢見たことがない。そんなことは夢見たことはない。必ず正しいことは勝つ。我々が倒れるのは起き上がらんためと見なしたもの、挫折した時にはよりよく戦わんためであり、眠るのは目覚めんがためである。

「そういうような私であるから、かしこにおいても自分はここにおけると同じように次の世界でも生きるつもりだから」

という盛んなるかなこのブラウニング。詩人の中でブラウニングぐらい盛んな魂は珍しい。ブラウニングなんてのは難しいから、私はとても所々でしかかじれませんけれども。

「人もし仆（たお）るれば起きかえるにあらずや」

と。どうして、そんな力があるか。いいですよ、私なんか生まれつきは弱虫なんだから。ところが、起きかえるからしょうがない、ダルマみたいに。これはやはり御霊のバプテスマが来てから、そういうことになってしまった。

まだあなた方は若いから、何か悄気（しょげ）かえってどうにもならないようなことになる人もあるけれども、どうぞ、その時はさっきの

主さま！」

でいい。全存在で「主さま！」と叫ぶと、直ちにキリストの本願が答えたもう。そういうことで、この4節は非常に力強い。

●本然の霊を受けよ

7天空（そら）の鶴（つる）はその定期（とき）を知り　斑鳩（やまばと）と燕（つばめ）と鴈（かり）はそのきたる時を守る

空の鳥、コウノトリ（鶴）がちゃんと何時どこへ渡っていくかというその時期をちゃんと知っている。斑鳩（やまばと）も燕（つばめ）も、これはみんなもちろんパレスチナにいるわけです。だから、よくエレミヤは自然を見ているわけだ。この鴈（かり）はだいぶツバメに近いような鴈（かり）だそうです。その渡り来る時をちゃんと本能的に守っている。全くこの自然界のいろいろな現象を見て

いると、不思議なものだね本当に、植物にしても動物にしても。ちゃんと自然界の法則に乗ってますよ、彼らは本能的に。

これは聖書にあるとおり、人間は智慧というやつがよほど妨げになる。

「神無き智慧は悪魔をつくる」

という。まさに今の世の中は、20世紀は神無き智慧でたくさんの小悪魔をつくっている。世界はどういうことになるか正直わからん。いろんな智慧が欲望と一緒になって、欲と智慧が絡まって、これが文明文化を非常に毒しているわけです。自然の法則に乗っかっている動物や植物の方がよっぽど幸いだ。

だから、ルソー〔Jean-Jacques Rousseau 1712～1778〕あたりも

「自然に帰れ」

なんていうことを言うんだよ。

「人間の本当の本能に帰れ」

と。本能というのはいわゆる本能ではない。人間の本能というのは、

「本然のすがた」

「本然」とはいい言葉だね、「本の然り」。即ち、神につくられ「神の似姿」として我々は存在する。その神の似姿というその本然に、神と実は「ホモウジオス」、同性、同質である。これを本当にやったのはキリストだけだけれども。我々はその同質なるものを本質的に失ってしまった。だから、キリストがどうしても、

「もういっぺん本然の霊を受けよ」

と。この「本然の霊」が即ち聖霊です。本然の霊、聖霊を受けると本然の人間に返っている。我々はどうせ滑ったり転んだり躓いたりするよ。けれども、本然のものが、御霊の力が、何かそれからまた押し出していく。絶対に倒れっきりにならない、迷いっきりにならない。

「善い人間は、よしや暗い衝動に促されても
正しい道をしかと心得ているものだ」
„Ein guter Mensch in seinem dunklen Drange
Ist sich des rechten Weges wohl bewußt.“

と、ゲーテが言ったけれども、あの「善き」とは、信仰の世界でいうなら、神・キリストと連なっていなければ、「善き」ということは言えない。そうしたらば、正しき道をちゃんと自覚しているから、迷ってもまたもとへ戻る。相対的な我々の奥に、

「本然の我が見えないか」

と。ペテロと同じように

「我を見よ！」

と。敵に向かって言ってやればいい。それが本当に敵を愛することだ。それは必ず勝ちますよ。どんなことがあっても、キリストにある者は。負けたようだが、実は本当の勝利だ。

その時その時の現象で勝ったり負けたりなんていうことで一喜一憂する必要はない。本当の勝利はわがうちにありと。

●愛は一切に勝つ

「愛は一切に勝つ」

という。私はヒルティさんのあの墓碑銘は大好きなんだ。

「アモール　オムニア　ヴィンキット」(Amor omnia vincit.)

今、実は私はヒルティのことを書いているんだけれども、昨日は午前3時まで書いた。あれだね、一日学校を休むと仕事ができるね。昨日は二つ僕は小論文を書いてしまった。全体で18頁くらい。これから1日、学校を休もうと思う。これはもう教頭にちゃんと言ってある。それはそうだよ、校長はちゃんと実のある仕事をしていないで校長であり得るかというんだ。ただ学校に出ていることが能ではない。大学に1日行って、あとの5日間全部、高等学校に行っているから、今までずっと4年間。もう70歳になったから、この辺で1日位休ませてもらわなければ仕事ができやしない。とても楽しいね、1日家にいて書いていることは。

「愛は一切に勝つ」という。これはお釈迦さんでもキリストでも、あの愛で、慈悲で勝った。どうぞ、クリスチャンはくすぶっていたらダメですよ。どんなことがあっても、ニコニコしていなければ、ことに女の人はね。女の人がくすぶっていると、こっちも何かおかしくなっちゃうよ（笑）。まぁ男はキリッとしていたっていいけれども。しかしまぁ本当の笑い――女性は微笑(ほほえ)み、男は大笑い――呵々大笑という。呵々大笑できないような男はまた男でないし、微笑めない女は女でない。余計なことばっかり言ってますけれども。

「愛は一切に勝つ」という。ヒルティは本当にそういうひとです。彼はアルメニヤの孤児院の孤児に――少女ですよ可哀相な――孤児院から成長して出るまで、年金をちゃんと送ってやっていた、密かに。それが出たら、

「その次に誰かいませんか」

と、五人目をやっているうちに、ヒルティは亡くなってしまった。そういうことをあとで孤児院の報告があったので分ったということですが、やはりヒルティという人はそういう人格でした。

大空を行く自然界のコウノトリや何かは全部、自然の法則をして何時飛んで行き、何時向こうへ行くかを知っている。

時々テレビでやっているね、この自然界の――私はああいうのを見るのが好きなんだけれども――今朝はアユをやっていた。アユのさかのぼり。海から遡ってあんな小さなやつがもの凄い、鯉にもまけない力を持っている。段階のような段の上を昇っていくのにはおそれいった。最後には人間に食われたりして、人間というのは罪が深い（笑）。だから、肉

食をしないで菜食をしようという坊さんたちの気持がよくわかります。とにかく、生き物を食べたり何かしたら、拝んでおかないとダメですよ。人間は止むを得ざる悪をなすから。しかし、よくなすから仕方がないのではなくて、どこまでも矛盾は矛盾としながらも、神を拝する、畏れることは畏れていかないと、霊界の法則に反するです。

●法に乗っかることが本当の自由

だから、今ここに書いてある、私が霊界の法則といったことが。

されど我民はエホバの律法をしらざるなり

エホバの法則を、法を知らない。この場合はもちろん、「律法」のことを言ったかもしれないけれども、しかし、エレミヤはいわゆる律法主義ではないから。心に響くところの法、心に響くところのダルマです。本能的に神さまの法というものに、

「法に乗っかることが本当の自由」

なんです。今の一般の「自由」だの「自主」だのというのはお話にならない。

「汝の御意を成させたまえ。この我を通して成させたまえ」

というのが、キリストの祈りではないですか。キリストは挺身して、自分を神の活ける法則の中に、

「生命の御霊の法」

の中に――ローマ書8章2節――その中に彼は自分を置いて、そして動かれた。だから、キリストは天衣無縫の自由者である。天法に、天の法則に、霊法に全く沿ったがゆえに、これは本当の自由である。このことは、この宗教の本当の世界を知らないと分からないんですよ、一般の道徳の世界では。

私はもう学校で、中学生にも高校生にも言う。教育の根本にはっきりと宗教を置いている。いわゆるミッション・スクールなんていうのとはちがう。こっちは本ものだから。

私は永いこと、この「法」とか「義」とか聞くと、あまりいい気がしなかったけれども、義も法も同じなんです。神さまの御意に従う、これを義という。それは即ち神さまの御意は活ける法です。いわゆる人間の道徳の正義なんていうのとはちがうんです、この義は。どうもそういうことをはっきりと書いてないね。しょうがない。私がそのうちにはっきりと書くから――もう書いてますけれどもね――あれは早く出さなくていかんな。〔註：著作集第1巻『無者キリスト』（１９７５刊）のこと〕

7天空の鶴はその定期を知り　斑鳩と燕と鴈はそのきたる時を守る

「鶴や斑鳩や燕や鴈」に人間は劣るではないかというわけだ。自然界のものは自然の法則を知っている。人間は霊界の法則を知りそれに従わないで、どうして人間であり得るか。それをなぜ宗教のことをそっちのけにするんですか。それくらいに間違っている、根本的に。

ブルンナーが『教会の誤解』という本を書いたけれども、宗教の誤解だか何だかしらんが、

そういうことになっている。そこ（演題の横の本棚）にあるバルトの『ドグマティーク』〔教会教義学〕の最後の著作のところにも、「御霊のバプテスマ」と「水のバプテスマ」のことばっかり書いてある。それくらいバルトも最後にはこの聖霊のことに気がついた。ブルンナーもそうです。今は、キリスト教の、バルト、ブルンナー、ブーバー、ティリッヒ、ヤスパースという偉大な哲学、宗教界の〔人物があいついで亡くなってしまった〕。しかしながら、あなた方は偉大なひとでなくても、その偉大さは、絶大さはあなた方一人びとりの中に入ってくるんだから。この御霊の世界は、御霊を宿したらもういいんです。器の大小は問題でない。そういうわけで、

「わが民はエホバの霊法を知らん」

という。

●平和の奥には平安がある

8汝いかで我ら智慧あり われらにはエホバの律法ありということをえんや

この場合の「律法」というのは「トーラー」という字が書いてあって、さっきのは「ミシュパート」という字が書いてある。言葉が違ったって大丈夫です。

視よまことに書記の偽りの筆 之を偽りとせり

「之」というのは「申命記」の律法のことです。

9智慧ある者は辱しめられ またあわてて執えらる 視よ彼等エホバの言を棄てたり 彼ら何の智慧あらんや

神さまの言を棄てたらもうおしまい。これは霊言ですから。４節、７節が大事なところ。

10故にわれその妻を他人にあたえ 其田圃を他人に嗣しめん 彼らは小さき者より大なる者にいたるまで皆貪婪者 また預言者より祭司にいたるまで皆詭詐をなす者なればなり

もう悉くダメだと。エレミヤは独りです。エレミヤもなかなか勇敢にものを言うからね。

11彼ら我民の女の傷を浅く医し 平康からざる時に平康平康といえり

「平和の奥には平安がある」

と私はいいましたね。「シャーローム」という同じ字です。「傷を浅く癒しておいて、平安と言う」と。私は人に手紙を書くと、必ず封筒の表に

「平安」

と書く。

「あなたに平安がありますように」

という祈りの気持です。平和とは書かない。平安です。神さまとの連なりを「平安」といいます。神さまとの連なり、キリストとの連なりのないのは、平安はありません。そこにのみ平和がやってくる。

「**幸いなるかな、平和ならしめる者、その人は神の子と称えられん**」とキリストは言ったけれども、

「平和ならしめる者は先ず平安でなければいかん」

ということ。キリストはそこまで仰らなかったけれども。

とにかく、御霊の世界で、御霊の光でこの聖書を読んでいると楽しいですよ、次から次へと真理が湧いてくるから。私は何も考えていないんですよ、これ。

12 **彼ら憎むべき事をなして恥辱らる 然れど毫も恥じず また恥を知らず この故に彼らは仆るる者と偕に仆れん わが彼らを罰するときかれら躓くべしと エホバいいたもう**

大体、旧約も新約もみなヤーヴェーの神に躓き、新約ではキリストに躓く。本当のものが現れると躓くんだからね、困ったもんだねこれ。キリスト教界でもそうですよ。いい加減なことを言っていれば、みな躓かないんだ。ところが、はっきりしたことを言うと、躓いてしまう。そういう、気の抜けたような、一遍サイダーの口の抜けたようなのが――あれは開けたらパッと飲んでしまわなければいかん。それでないと気が抜けてしまうから――そういう教会がどうも多いようですね。

どうぞ、皆さんは、君たちはみんな一人びとりが幕屋を張る責任を持っているぞ、責任と使命とを。そのうちに私はこの集会を閉じて、私はそこらここらを応援に行くようにするから。集会解散というわけだ。ああもう世界中至る所に本当のひとにぶつかりますよ。

●我は葡萄の樹、汝らは枝

13 **エホバいいたもう 我彼らをことごとく滅ぼさん**

またエホバの言は強いですよ。

葡萄の樹に葡萄なく 無花果の樹に無花果なし その葉も槁れたり 故にわれ殲滅者を彼らにつかわす

強い言葉だね、

「葡萄の樹に葡萄なく無花果の樹に無花果なし」

と。それで今日は、「葡萄の樹に葡萄なし」と題した。「葡萄の樹に葡萄なし」のあとの「葡萄」というのは葡萄の房のことで、別の字が使ってある。「無花果の樹に無花果なし」は同じ字で、「無花果の樹」と「無花果の実」は同じ字を使っている。葡萄とか無花果というのは、旧約から新約に至るまで聖書の中に一杯出てくる。しかもよく対で出てきます。これをあげたら大変です。それくらいユダヤ人の生活には、葡萄、無花果、オリーブのこの三つがたくさん出てくる。そして非常に大事なものです。葡萄は血の象徴でもある。

「我は葡萄の樹、汝らは枝なり」

という有名なヨハネ伝15章もそのとおり。葡萄の樹に葡萄が実らない。無花果の樹に無花

果がない。それで、キリストもいっぺん無花果の樹を枯らしてしまったね。実がないないので、

「お前たちはちょうど実のならない無花果みたいなわけだ」

といって、枯らしてしまった。まぁとにかく、無花果にあれすれば枯らしてしまうようなキリストですから。……なぜ実が成らないかということは、葡萄が本当の葡萄でないからです。本当の葡萄なら、成るんですよ。

「クリスト者にクリスト者なし」

「日本人に日本人なし」なんていうのと同じことだ。キルケゴールが嘆いた、

「クリスチャンは天才より少ない」

と。天才は非常に少ないんだが、それより少ないのはクリスチャンだと。キリストが

「お前はわが僕なり」

と言われるクリスチャンが一体、幾人いるかというわけです。

「弱ったな、それでは私はとても落第だな」

と思うかもしれない。そうじゃない。落第生が及第する。「私は及第した」なんて思うと落第しちゃうよ。「今日は出来ました、出来ました」なんて言っていると、落っこちちゃう。

「どうも、あそこを間違えて、私は悄気てしまって、これはとても入れません」

という人が入ってみたりね。〔註：著者自身の中学入学試験の時の経験からか〕

「自分は葡萄の樹ではありません」

と思ったら、どっこい葡萄の樹だったということ。これはやはり太陽の光を本当に受けている葡萄の樹です。即ち、聖霊を本当に受けているクリスト者ならば、それは天才よりも今度は多くなる、もちろん。万人が本ものでありうる。誰でもが本ものでありうる。誰でもが本ものでありうるものが一番尊いものです。ある選ばれた人でなければ成れないなんていうものは本当は尊くない。大したことはない。最高最深の世界は無条件に受けとる世界です。「葡萄の樹に葡萄なし」というが、みんなあなた方は

「まことのクリスト者」

である。どんなに躓いても転んでも大丈夫です。本ものは必ず実を稔らせてきます。しかしどんなに良さそうに見えても、本ものでないものはいつか枯れてしまう、倒れてしまう。だから、

「葡萄の樹（き）に葡萄なく 無花果（いちじく）の樹に無花果なし」

というこの言葉は非常に含蓄のある力強い言葉です。

「人多き人の中に人ぞなし、人となれ人」

とかいう、本居宣長の歌があるね。提灯を下げて昼間、何を捜しているかというと、ソクラテスは人を捜していた。

「我は葡萄の樹、汝らは枝なり」

という、キリストという葡萄の樹に連なっていると、本当の枝である。

「我は葡萄の樹なり、我は無花果の樹なり」

と、はっきり言えなければダメですよ。

「今は実が稔っていないかもしれないけれども、今に実るぞ必ず」

と、それだけの落ち着きをもってやってくださいよ。

「あの野郎はダメだな」

「いや、どっこい」

と。「どっこい」というものを持ってください。本質を、本当にキリストを受けとっていれば、その自信ならざる自信が出てきますから。いつも十字架のキリストの前に平伏して、

「ああ、自分はすっ飛んでいます」

ということです。

「われキリストと共に十字架せられたり。もはや生くるにあらず。キリスト、御霊のキリストがわがうちにありて生きたもうなり」

と、このパウロの告白は何度でも自分のものに本当にしていかなくては。

●頼山陽の方向転換

あとはもう読む必要はない。ずっと自分で読んでください。エレミヤは嘆いて18節、

18 **嗚呼われ憂う いかにして慰藉（なぐさめ）をえんや 我衷（うち）の心悩む**

という。頼山陽（1781～1832）という有名な人がいるでしょ、漢文の『日本外史』を書いた。あの頼山陽はなかなか青年時代は造反式な男だったらしい。放蕩でもあるし、ちっとも親のことも考えないし、非常に向きがとんでもない方を向いていた。ところが、彼は才能があるものだから、『日本外史』を書いて、特に楠木正成（まさしげ）、正行（まさつら）、あのくだりを――私も覚えています、思いだしますけれども――素晴らしいところです。それで、得意になってしまってね、彼は。「何々海」とかいう有名な坊さんがいた。その坊さんの所へ、その坊さんを知っている別の坊さんに案内されて行って、大いに誉めてもらうと思って行った。その何々海という坊さんは頼山陽を見てすぐ思ったんだね、「これは山陽だな」と。ところが、もう山陽の本質を見てしまっている、その坊さんは。

「大体、何しに来たか」

というわけだ。けれども、その問答の一番先に、この坊さんは、

「世の中には非常に
懐にしているものはまだ分からないんだね、何を持ってきたか。
世の中には文章家もいる。けれども、いくら文章は、巧言令色少なし仁というように、非常に文章はうまくても、そのことを自分の身で実践してない者は空しいことだ。この頃ちょっと噂に聞いているが、頼山陽とかいう男がいるそうだが、

それはなかなか名文家だそうだが、大変身持ちの悪いやつだという話だ」と、別な坊さんと話をしているうちに、もう頼山陽は参ってしまった。自分のことを言われているものだから。それで、一体何しに来たかということもそこそこにして、

「今日はこれで失礼いたします」

と、頼山陽は帰ってしまった。しかし、彼はさすがにこの坊さんの言葉が自分の肺腑を突いたものだから、参ってしまった。それですぐ身支度をして――彼は京都にいたから――広島のお父さんの所へさっそく旅に出掛けた。そして、非常に

「大変御無沙汰して申し訳ない」

と、親孝行を表した。それでこの方向転換がはっきりしてしまった。それから頼山陽は本当に文章が単にうまいばかりでなくて、魂のこもったものになったというわけです。ある時、荘子の講義をしていた時に、父が危篤であるとの飛脚が来た。そこですぐ直ちにその講義をやめて、お父さんの所へ戻って来たけれども、臨終に間に合わなかった。彼は文字通り三年の喪に服したという。三年の喪に服して酒も飲まず、宴会にも行かず、謹慎していた。そして、専ら著作に没頭した。これは本当に鮮やかな方向転換をした。

さっきちょっと方向転換からお話しようと思っていたが、忘れていたけれども。昔の人はとにかく、滑っても転んでも、魂があるからね。今の若いので魂のないのが一番困るよ、魂がお留守になっているのが。エレミヤが、

18 **嗚呼われ憂う いかにして慰藉(なぐさめ)をえんや 我衷(うち)の心悩む**

と、本当に民のために彼は心を砕いて悲しんだ。しかしながら、神につけるところの悲しみは決して空しくない。人間的な悲しみではないから。

22 **ギレアデに乳香あらずや 彼処(かしこ)に医者あるにあらずや いかにして我民の女(むすめ)はいやされざるや**

これは最後の言葉ですけれども。それから9章にいくと、もっと深刻な言葉が出てきます。エレミヤは深い涙の人でありました。神さまの言葉を受けては、もの凄く強い人のように怒りの言葉を忌憚なく発するけれども、彼は深いハートのひとであった。聖霊は一番深い愛の霊です。私がさっきから言っている「愛は一切に勝つ」というのはその角度の――単なる同情ではない――相手を救いあげるところの、敵を荷いあげるところの、その愛。これは本当にそうです。どんなに悪口を言われようが、迫害されようが、相手が可哀相になる。そして本当に祈ってやることができる。

私はいわゆる無教会から出て、その頃にはさんざんいろんなことを言われたけれども、お気の毒なんだよ、相手が。聖霊の世界からズレているから。使徒たちの、パウロさん、ペテロさん、ヤコブさんが天界で味方であると思えば、何もさびしいことはない。そういうことです。終わります。讃美歌499番「みたまよくだりて」を歌いましょう。